

水俣病授業実践の展開 —水俣芦北公害研究サークルにおける「差別」への取り組み—

基礎教育学コース 久島裕介
教職開発コース 佐野良介
基礎教育学コース 長戸光

指導教員 浅井幸子

I はじめに

本稿は、水俣芦北公害研究サークルの教師たちの取り組みに着目して、公害教育運動における意義を明らかにすることを目的とする。水俣芦北公害研究サークル（以下、「サークル」と略記する。）は、1976年に組織された教師サークルである。その発足の中心的なメンバーは、1968年に結成された水俣病運動支援組織「水俣病市民会議」に参加していた。

サークルの水俣病授業実践は、1960年代末に生起し、1970年代に広まった公害学習運動の一環に位置づけられる。中内敏夫は、公害学習運動において教師は、「人権に対応する科学知のにない手とつくり手」であるという。そこでの教師の仕事は「参加し、記録し、共有する」という三つのステップがあるとされた。公害学習はまず、「住民の学習にまなぶ」こと、つまり公害闘争への参加なしには成立しえない。そして教師は住民運動を支える「調査と記録」に取り組み、「既存の科学」に対する「新しい科学」を創造する。最後に教師は「調査し記録したことを子どもに伝え、かえしていく」（中内 1998 458-463）。当時全国で展開された住民運動が多様であったことを踏まえれば、こうした三つのステップで展開した公害学習も多様であったことが示唆されるだろう。

このような人権に対応する科学の担い手としての教師による授業実践の代表的なものとして、水俣病授業実践、特に1968年11月の熊本市における田中裕一の授業実践が位置づけられてきた。藤岡貞彦によれば、田中裕一の授業実践は、「子どもの認識と価値観の発達をそだてる教育的価値」に貫かれた「なまなましい素材」によって、「教育的感動と知的興奮」を味合わせるものであり、「科学と人権のひろく深い認識の世界へ自己を解放していく」ものであった（藤岡 1975 28, 29）。

サークルの水俣病授業実践も、住民運動への参加を契機とし、人権の問題を重視した点において、公害教育運動、なかでも水俣病授業実践の文脈に位置づけられるといえるだろう。その一方でサークルの教師たちは、水俣病運動という住民運動に参加する過程で従来の公害学習運動では捉えきれない課題に直面し、固有の授業実践を生み出していったのである。その一端は、サークルの「授業実践のための基本的視点」への記述に示される。そこでサークルは、まず全国的組織である「公害と教育」研究会の綱領を引用した上で、「更に、水俣芦北に生活する私達には、より厳しい視点が求められる」として、以下のように記述する。

私達は、金銭であがなうことのできない人間の生存と、差別の問題を深く内包する水俣病の実情を教えることで、疎外された人間関係の復権、価値判断の変革を自ら志向できる子ども達を育てるための授業実践にとりむくものである。(田中 1978 6)

このようにサークルは水俣病を「人間の生存と、差別の問題」を深く内包するものとして捉え、その変革のための授業実践を模索したのである。では、水俣の教師たちのこのような視点はいかにして生まれたのか、また、こうした視点のもとで追究された授業実践はいかなる意義を有していたのか。

水俣の教師たちの取り組みについてはこれまで、サークル発足以前の取り組みや、サークルにおける水俣病の教材化などが論じられてきた。安藤(2012)は、水俣の教師たちは水俣病運動に参加するなかで固有名を持つ患者と出会い、その出会いを契機として1970年代初頭に水俣における水俣病授業実践が誕生したことを明らかにしている。本稿では、こうした過程を踏まえつつ、その後1976年に発足したサークルにおいて、いかなる授業実践へと展開していったのかを検討するものである。サークルについては、まず土井(2018)が、サークルの教師への聞き取りを中心に、サークルの成立の背景や授業実践の特徴を検討した。ここでは、1975年の「患者差別弁論事件」(後述)を契機として、従来の水俣病授業実践が不十分であったことが反省され、サークルが組織されたことなどが明らかにされている。また内山(2014)は、サークルの教師たちが患者(家族)への聞き書きから作成した読み物教材を分析し、サークルの教師たちが作成した教材は、患者の声に接近し、その内面的な語りを内面的な性格を保ちながら再文脈化することで、現象を外側から取り扱うのではない仕方子どもと水俣病患者の世界をつなぐものであったと論じている。これらのサークルについての研究では、その授業実践の実態解明が課題とされている。また水俣病授業実践を代表する田中裕一の水俣病授業実践に言及しながらも、その異同については検討されてこなかった。

以上を踏まえ本稿では、田中裕一による水俣病授業実践を視野に含めつつ、1970年代後半に追究されたサークルの授業実践の固有の意義を明らかにするために以下の課題に取り組む。第一に、1960年代末から1970年代初頭にかけての水俣病運動に教師たちがいかなる立場で参加し、何を学んでいたのかを検討する(Ⅱ節)。第二に、1973年3月の第一次訴訟判決後、水俣病問題がいかに展開し、その変化を水俣の教師たちがいかに受け止めたのかを明らかにする(Ⅲ節)。第三に、水俣病問題の展開を背景に組織されたサークルの活動と、そこで追究された授業実践の分析を通して、サークルの授業実践の固有の意義を明らかにする(Ⅳ節)。

なお、資料としては、日本教育会館教育図書館、水俣病センター相思社、水俣学研究センター等所蔵の、当時の教師たちの記述を中心に用いる。また、2021年11月にサークル3代目会長を務めた田中睦(1951年生)への聞き取りも補足的に用いる。

Ⅱ 水俣病運動における教師

1 市民会議と教師

水俣病運動を主導したのは、1968年1月12日に結成された初の水俣病運動支援組織「水俣病市民会議」（当時は「水俣病対策市民会議」、以下「市民会議」と略記する。）であった（丹野 2012）。市民会議に参加した教師たちが中心となり、1976年にサークルが組織され、水俣病授業実践が追究されていくこととなる。ここでは、当時全国的に展開されていた公害教育運動において、水俣の教師たちの運動への参加にいかなる特徴があったのかを検討したい。

教師たちは水俣病運動にいかなる立場で参加したのか。この点について、原告側全面勝訴となった水俣病第一次訴訟（1969年9月提訴、1973年3月判決）の後、1973年8月に水俣市で開催された第三回「公害と教育」研究全国集会（以下、「全国集会」と略記する。）における教師の報告を中心に検討する。

水俣の教師たちの立場を検討する前に、当時の公害教育運動において教師にはいかなる立場が期待されていたのかを確認したい。この点について公害教育運動を主導した藤岡貞彦は、全国集会の「新全総と住民運動」分科会において、以下のような見解を示していた。教師は第一に、公害の諸現象を自然科学と社会科学の双方の光に照らして事実を明らかにする「科学者としての専門性」を有する存在であり、第二に、反対運動組織のオルガナイザーでもある、つまり公害教育運動において教師は「科学者」と「組織者」という二つの役割を担う存在であるという（藤岡 1974 99, 100）。

しかし、水俣病運動に参加した教師たちは、そのいずれでもなかった。同じ分科会で西弘（水俣病市民会議・教師）は、自らを「運転手」とであると表現している（梅田・西 1974 103）。それはいかなる意味であったか。西は、市民会議の性格を以下のように記述する。

この闘いのなかで、患者さんが常に先頭で市民会議が先に立ったことは何一つありません。この闘いは僕たちの既成概念では勝てなかったんじゃないかと思っています。[中略] 銭は一銭もないからもとのからだにして返せ、ということは理屈ではないと思います。理屈を理屈として僕たちが判断することがそもそも間違いであると思います。その理屈の壁を破ったところで、今度の水俣病の闘いが新しい突破口を開いたという感じも持っています。

[中略] 一株運動をやるとき、一番支障になったのは水俣病弁護団でした。弁護士という専門家は裁判という土俵が絶対であり、そこでの枠を超えるものはある面では排除する動きもあったわけです。僕たちの考え方としては患者さんのしたいこと、やることを全面的に理屈ぬきに支援するんだということで一つの成果をおさめたといえると思います。（同上 104, 105）

ここに示されるように、市民会議は患者の「したいこと、やること」を全面的に尊重する

こと、言い換えれば運動の正しさを専門家が外部から規定するのではなく患者の意志貫徹させることが現実の変革につながるのだと認識していたのである。このように患者の意志に従って運動を進めていく立場を西は「運転手」と表現したのであろう。石牟礼弘（水俣病市民会議・教師）も同様に、「支援のものが患者をさしおいて前に出してしまうことがないように」、自らを「患者の助っ人」と表現していた（石牟礼 1974 142）。このように、専門性を有する「科学者」や「組織者」としてではなく、患者の意志に従う「運転手」、「助っ人」として、水俣の教師たちは水俣病運動に参加していたのである。

2 水俣における水俣病授業実践の萌芽

教師たちはこのような立場で水俣病運動に参加するなかで、患者と出会い、水俣における水俣病授業実践に取り組み始めた。安藤（2012）は、当時を代表する授業実践として、広瀬武（水俣病市民会議・水俣市立葛渡小学校）が 1971 年 2 月に患者の浜元二徳を教室に招いて行った授業を取り上げている。

安藤（2012）は、この広瀬の授業実践は、田中裕一の授業実践とともに「きわめてユニークな、それでいて黙示録的普遍性を持つ営為」であったと評価しているが、まさに両者は同様の問題意識のもとで取り組まれた授業実践であったと考えられる。試みに両者の授業の目標を比較してみよう。田中は、「(1) 経済成長下の日本の公害の実情を理解させる。」、「(2) 熊本の公害として水俣病の問題を摘出させる。」、「(3) 水俣病の問題にある公害の責任と処理方法を究明させる。」ことを目標としているのに対し（田中 1972 56）、広瀬は、「(1) 「水俣病」は何のつみもない人たちが、工場の無責任な有機水銀のたれ流しによるものであること→企業優先のかげに人命無視」、「(2) 公害をにくむ子どもを育てる→人権意識のこう揚」、「(3) 生活の現実を見つめ、社会の矛盾を考えさせる→公害の社会的責任を追求する。」ことをねらいとしていた（松本 1972 12）。このように、両者は公害の被害の実情を踏まえた上で、公害の責任追及主体の形成を目指した点において共通していた。

二つの授業実践について本稿における関心から指摘されるのは、両者は共に差別の問題に言及していない点である。後述するように、差別の問題は 1973 年 3 月に水俣病第一次訴訟で原告側全面勝訴となった後に焦点化するものであり、この問題こそが、サークルの教師たちの授業実践を特徴づけるものとなっていく。

Ⅲ 水俣病問題の転換と従来の授業実践への反省

1 「内なる差別」への展開

サークルの初代会長となる鶴山寅亀は、先述した全国集会において、判決後にも多くの問題が残されていることを指摘していた。鶴山は、水俣病の病名変更という動きに代表されるように、「市民の意識がどれほど変わったかというところに、大きな問題が残されている」と認識していた（鶴山 1974 31）。この問題を西は、「外なる告発糾弾と並行して、内なる差別連帯の闘へと移りつつ」とあると端的に表現し、さらに教師はその問題の「最も近くにある」

のだと認識していた（西 1977 1）。このように水俣の教師たちは、1973 年の判決後に、水俣病問題が「内なる差別」の問題へと転換しつつあり、教師はこの問題において重要な役割を担うと認識していたのである。

ここで着目したいのが、教師たちは患者との交流の中で、自分たちがこうした差別の問題と無関係ではないことに気付かされていたことである。鶴山と広瀬は、市民会議のメンバーとして、患者家族への聞き書きを行っていた。その中で二人は、田中義光から、1956 年に三女しず子、四女実子と相ついで発病した当時のことについて聞き書きをした¹⁾。田中は、家庭訪問で教師がお茶を一杯も飲んでくれなかったという話、一家のきりもりをしなればならなかった長女（当時 6 年生）がどうしても遅刻が多くなるのに対して、理由も聞かずに罰を与えていたという話、そして学校では誰も一緒に遊んでくれず、それに対して教師は何も手だてをしなかったという話などをした（広瀬 1994）。広瀬はこうした話を聞くなかで、「学校の教師は水俣病患者・家族にとって差別者であった」ことを自覚したという（広瀬 1994 11）。田中の語りが示すように、「内なる差別」の問題へと展開していた水俣病問題においては、教師も子どもも「差別者」としていわばその当事者なのであった。鶴山と広瀬は田中からの聞き書きを「患者家族はうったえる」という読み物教材としてまとめ（水俣芦北公害研究サークル 1979）、この教材は後述するようにサークルの授業実践に活用された。

2 従来の授業実践への反省

1975 年秋、「内なる差別」を象徴する「患者差別弁論事件」が起こる。この事件を契機に、水俣の教師たちは従来の授業実践を反省し、サークルを組織することとなる。以下では、サークル発足当初にその問題意識を強く主張していた西弘の議論によりながら、サークルの教師たちがこの事件をいかに受けとめ、従来の授業実践がいかに反省されたのかを明らかにする。

「患者差別弁論事件」とは、1975 年の水俣高校定時制の校内弁論大会において一位となった、「水俣病という名前に対して」という弁論をめぐる事件である。事件の概略は以下のとおりである。この弁論には「水俣の魚を好きこのんで食べた人がいる。」「いざ水俣病になると、会社側が悪いの保金をだせと騒ぎ立て、お金をもらい楽な生活ができるのをうらやましく思う。」「お金しだいの世の中だから、その方がいい。」という内容が含まれていた²⁾。この弁論大会の席に患者家族の生徒が同席しており、弁論途中に抗議したが、場外に出された。その後、各患者組織が高校に責任を迫及し、後日高校は公害教育を推進すると確約するという事態になった（西 1977）。

西はサークル発足の経緯をまとめた 1976 年度の教研報告において、この事件が、水俣の教師たちに従来の授業実践への反省を促すこととなったと論じている。水俣の教師たちにとって重大な意味を持ったのは、この弁論作品を書いた生徒が、水俣市の患者の 7 割近くを占める地区に居住し、数多くの水俣病患者家族の同級生をもっていたという事実であった。この事実は水俣の教師たちに、従来の授業実践が「何らの成果をも上げていない」との認識

に至らせ、従来の授業実践への反省がなされた（同上）。

では、水俣の教師たちは、従来の授業実践のいかなる点を反省したのか。西は 1978 年度の教研報告において、「はたして本当に、患者の写真を、映画を見せたことが新しい力をうみだしたのでしょうか。」と問題提起をしている（西 1979）。この問題提起は、1973 年に熊本県教組の提起により実施された全県一斉の水俣病授業実践と、そのモデルとなった 1968 年の田中裕一の授業実践を念頭に置いていると考えられる。

1968 年の田中裕一の授業実践では、「公害のもっとも特徴的な、もっとも典型的なものをとり上げ」という考えから（田中 1972 27）、桑原史成（写真家）による、「松永久美子さんほか患者の様子を写したもの」、「漁民である患者家庭の貧しさを写したもの」など 12 枚の写真を、「悲惨さ」を「芸実つ的な品位にまで現実を結晶」させたものと把握して水俣病授業実践に使用していた（同上 58-59）。熊本県教組は、この授業実践をひとつのモデルとした手引書『公害と教育』および『水俣病写真教材』を 1972 年に編集発行した。広瀬武は、水俣芦北支部の 43 校中 41 校で実施された 1973 年の一斉授業において、約半数の教師が『公害と教育』を使用し、約 3 分の 2 の教師が『写真教材』を使用したと報告していた（広瀬 1974 64, 65）。このように田中裕一が最初に取り組んだ写真を用いる授業実践は、水俣病授業実践の典型として普及していたのである。

西は、このような写真などを用いて、「水俣病の歴史とその最もひどい実情を誠実に教え」る授業実践は、「内なる差別」が問題となっていた水俣においては逆効果であると考えた（西 1982 44）。1973 年の判決後の水俣では、一方では被害補償金をめぐる対立が深刻化しており、他方では水俣病の被害の広がりや症状の多様化が指摘されはじめていた。こうした状況において上のような授業実践は、「水俣病に対する子どもたちの認識は、不眠、しびれや痛み、意識「障害」などの苦しみを欠落させた、学校で習った通りの、見た目では歴然とした「障害」症状をもつ被害者（医学で言う急性激症例、典型例）がほんとうの水俣病患者であり、それ以外は「ウソついてお金をとった人」という認識を子どもたちに与えるものであり、こうした授業実践こそが「患者差別弁論事件」を生み出すことにつながったのだと西は主張した（同上 42）。

このように水俣の教師たちは、「内なる差別」の問題へと水俣病問題が転換する中で、「患者差別弁論事件」を契機として、水俣病の悲惨な現実を伝えた従来の授業実践こそがこうした事件を生み出すことになったと反省した。こうした従来の授業実践への反省を踏まえ、教師たちは 1976 年にサークルを組織し、新たな授業実践を追究していくこととなる。

IV サークルにおける授業実践の追究

1 サークルの発足と展開

1976 年 6 月の第 1 回水俣芦北支部教研「公害と教育」分科会（39 名参加）において、「個人・教研研究の能力、時間的限界を打破して、活動を持続、継続させるため」に、この分科会を母体として「公害研究サークル」を組織することが提案された。その後、分科会員と活

動家らに案内状が送られ、1976年8月21日に分科会から17名、他分科会から16名の計33名を会員として「水俣芦北公害研究サークル」が発足した（熊本県教職員組合教文部編 1977 67, 68）。会員には、英語と音楽を除くすべての教科の教師が参加し、特に養護教諭が多かったという（西 1977 9）。

同日に発表された規約によれば、サークルの目的は、水俣芦北における「公害と教育」の研究と推進をおこなうこととされた。活動は、①小中学校における公害に関する実態の把握とその研究、②「公害と教育」推進のための会員の研修、③授業研究と学習教材の作成、④その他・本サークルの目的達成に必要な活動とされた。会員は水俣芦北小中学校教職員で、会長には鶴山寅亀が就任した（熊本県教職員組合教文部編 1977 68, 69）。

サークルは当初、「A、水俣病・ヘドロ問題関係」、「B、食品・農医薬・洗剤」、「C、自然破壊・大気汚染」、「D、公害全般」、「E、その他（差別を含め）」という5つの研究グループを編成するなど、公害問題全般を対象としていたが（同上 70）、地域性を考慮して、水俣病を中心に据えることとされた（田中 1978 5）。また、サークルでは、実践に広がりが見られないことが課題とされ、「何を」「どこで」「どのように」取り扱えばよいのかを明確化した「誰でも利用できる指導計画案と資料集」を作成することが目指された（同上 4）。こうして、発足から1年が経過した1977年8月に、サークルは「水俣病を中心にした公害教育学年別指導計画案」の作成を活動方針として決定した（同上 5）。

こうした方針のもと、サークルは同年10月に、「公害教育の基本方針」を示す「水俣芦北公害研究サークルの基本的視点」を起草した。ここではまず、①公害への科学的認識、②人間尊重の態度、③生存権・環境権の意義、④主権者としての態度を説いた「公害と教育」研究会綱領を引用した上で、「更に、水俣芦北に生活する私達には、より厳しい視点が求められる」として、以下のように記述した（同上 6）。

『生命に係わる水俣病問題を避けて、何をわれわれは教えているのか。』

『水俣病をとらえきれずに、何が安全・保健教育、何が差別・同和だ。』

水俣芦北の現実、苛酷で、空しく、切ない反面、人間を浮彫りにする。

『人間らしいふるまい方、生き方とは……』

『人間の豊かさ、豊かなくらしとは……』

私達は、金銭であがなうことのできない、人間の生存と差別の問題を深く内包する水俣病の実情を教えることで、疎外された人間関係の復権・価値判断の変革を自ら志向し、また、志向できる子ども達を育てるための、『水俣病を中心にした公害学習学年別年間計画案』なるものを企図するのである。（同上 6）

ここに示されるように、サークルの教師たちは、水俣病問題は「人間を浮彫りにする」問題、すなわち「人間の生存と差別の問題を深く内包する」問題だと把握した上で、この問題に取り組むことを通して、人間の「豊かさ」、「生き方」を問いながら「人間関係の復権・価

値判断の変革」を志向する子どもたちを育てることを目指したのである。

サークルは、この基本方針を具体化するために、まず 1977 年から 78 年にかけて、義務教育 9 年間を通じて、学期ごとの学習の観点と具体的な内容をもりこんだ「水俣病を中心とした公害教育学年別指導計画」を作成した。サークルは 1978 年 6 月の支部教研で「指導計画」に基づいた授業実践を依頼し、7 月に 14 実践が実施され、それを集約し 9 月に「実践報告'78」として発表した（西 1979）。ここで授業者の多くが計画に沿った教材・資料を求めたことを受け、サークルは 1978 年に「教材・資料集」を作成し、さらにこれら「指導計画」と「教材・資料集」をまとめた『水俣病・授業実践のために』を 1979 年 10 月に 1500 部刊行、水俣芦北の小中学校全校、その他希望の教師に配布した（西 1982 45, 46）³⁾。

2 田中睦による水俣病授業実践

以上のようなサークルの取り組みの過程で、水俣病授業実践はいかに変容したのか。ここでは、サークル発足時からの会員であった田中睦が 1980 年に実施した水俣病授業実践に着目して、この点を検討したい。

田中は、1951 年に熊本市に生まれ、1974 年に初任校として水俣市立袋小学校に赴任した。袋小には鶴山と広瀬が在籍しており、彼らが導き手となり、田中は水俣病患者・家族と出会うこととなる⁴⁾。こうした出会いの中で、田中は、「自分でも何かをしなければという気」になり、2 年目の 1976 年 2 月に実施された公害教育研修会において問題提起の授業を引き受けた（田中 1978 9）。田中は、袋小 5 年生を対象として、「公害をふせぐ」と題された全 8 時間の単元を計画し、研修会においては「第四時 工場と水俣病」という授業を実践した。サークル発足以前に実施されたこの授業の単元案・授業案にはサークルで重視された「差別」への言及はなく、企業の責任追及を中心とした授業であった（鶴山 1977）⁵⁾。以上のような過程を経て、田中は水俣病の根深い問題を認識し、西の誘いを受けて 1976 年 8 月に発足したサークルに参加した。田中は 1977 年度の全国教研報告で報告者を務めるなど、サークルにおいて精力的に活動した。

本稿で取り上げるのは、田中が 1980 年に水俣市立第二小学校 5 年生を対象として実践した「水俣病」と題する一年間の授業実践である。この授業実践には、サークルの問題意識が如実に反映されていた。以下、1980 年度の熊本県教育研究集会報告書に掲載されたこの授業実践の指導案（田中 1980。以下、引用部は特に言及しない場合は同文献を参照）を対象として、この授業実践の意味を検討する。

題材についての田中の認識を確認しておこう。田中はまず、水俣病は公害問題がその中に凝縮された「公害の典型」であり、そうした水俣病を題材として「真の豊かさ・やさしさ・人間らしい生き方とは……」を「児童とともに考えていきたい」と考えていた。また、子どもに対しては、「水俣病を知識としてはとらえている」一方で、「患者さんを見てどう思いますか。」という問いに「かわいそう」と答えた子供が 89%を占めたことを問題視し、「第三者的な同情に終わらせてはならない」という認識を示していた。こうした認識のもとで田中は、

先述した 1976 年度の授業実践における目標に加えて、「水俣病に対する誤った認識が差別を生み出す一因となっていることを知り、差別を許さない心情を育てる。」という目標を設定した。一年間の指導計画は以下の通りである。

基本認識（病像・原因・被害の広がり）：2 時間（社会）

「患者家族はうったえる」（患者の苦しみ）：1 時間（国語）

「見舞金調印のようす」（患者の置かれた立場）：1 時間（社会）

水俣病の歴史（被害の歴史、企業の体質、行政の対応、裁判）：5 時間（社会）

「水俣病という名前に対して」：2 時間（道徳）

このように田中は、一年間を通して「公害の典型」たる水俣病を学ぶことを通して、人間の「豊かさ」、「生き方」を子どもとともに考えていくことを目指した。そこで特に問題とされたのは、子どもの水俣病患者に対する認識が「かわいそう」という「第三者的な同情」ととどまっていることであった。こうした子どもに対して田中はいかなる授業実践を実施したのか。

田中は、以上の問題意識のもとで、第一に、サークルで共有された水俣病についての基本認識を子どもに伝えること、第二に、サークルの教師たちの聞き書きを中心とする教材を用いて患者（家族）の置かれていた立場を理解させることに取り組んだ。

第一に、基本認識の授業について。田中は授業で、水俣病の基本認識として「病像・原因・被害の広がり」を子どもたちに伝えたが、そこで田中が留意した点があった。まず、「被害の広がり」については、水俣病が水俣にだけ発生している事件ではなく、不知火海一帯の汚染であり、校区内にも多くの患者が存在していることに気づかせることを留意していた。さらに、「病像」については、写真を見せつつも、急性激症型の患者だけでなく、目に見えない苦痛を抱えている患者の様子も説明し、病像を限定してとらえさせないことを留意していた。

これらには、サークルで共有されていた水俣病の基本認識が反映されていたと考えられる。サークルは、1979 年 1 月に『熊本教育』誌上に「「水俣病の基本認識として：授業実践上の留意点」を公表していた。そこではまず、原田正純（医学）による、「激烈な急性・重症・典型例を診すぎたために水俣病像を固定的にとらえてしまった」ことを反省し、水俣病を「水俣病とは環境汚染を通じて過去、現在、未来にわたってメチル水銀によってもたらされた健康破壊のすべて」と改めて規定し、「重症典型例と健康者（汚染をうけた）との間には連続的なものであってそこに一線を画くことはできない」と結論づけた議論を示す。その上でサークルは、水俣病患者とは広義には「汚染環境地区全住人＝非汚染者」であるとの「基本認識」を示していた（水俣芦北公害研究サークル 1979 44, 45）。以上のようなサークルの基本認識を踏まえると、田中は基本認識の授業で「被害の広がり」や「病像」について伝えることを通じて、水俣の住人である子どもたちと水俣病患者とは、「一線を画」することは

できない、すなわち無関係ではあり得ないことを理解させようとしたのだと考えられる。

第二に、聞き書きを用いた授業について。田中は授業において、「患者家族はうったえる」、「見舞金契約調印のようす」という二つの聞き書きを用いて、「患者の置かれていた立場、苦しみを読みとらせる」ことを企図していた。いずれの聞き書きにおいても、患者（家族）が水俣の住民から受けた差別が克明に綴られている。ここで注目されるのは、鶴山と広瀬による田中義光への聞き書きをもとにした「患者家族はうったえる」において、学校における患者家族の困難が記述されている点である。

二人の妹たちが水俣病にかかったばかりに、家に残された四人の子どもたちは、学校でもたいへんつらい思いをしました。母親がいない留守をあずかっていた六年生の長女は、朝から炊事・せんたくをして学校に行くので、ちこくになり、いつも校庭に立たされていました。

「自分たちは貧ぼうだったから、先生からかまってもらえなかった。母ちゃんがいたら...と、涙がとまらなかった。」

先述したように、広瀬はこうした聞き取りから教師も差別者であったと気付かされた。それと同様に、こうした記述は、学校内にも差別—被差別の構造が存在する、すなわち教師、子どもが患者（家族）への差別者であったことを子どもたちに示唆するものであったといえるだろう。

以上のように、「基本認識」の授業も、「聞き書き」を用いた授業も同様に、子どもたちは水俣病の被害者、関係者、あるいは加害者として、水俣病の当事者であるということに気づかせるものであった。田中はこうした授業を通して、子どもたちの水俣病に対する「第三者的」な認識を克服しようとしたのである。

IV おわりに

本稿では、水俣芦北公害研究サークルに参加した教師たちが、いかに水俣病に出会い、何を学び、いかなる授業実践を追究したのかを検討してきた。以下では、本論の内容をまとめた上で、サークルの取り組みの公害教育運動における意味を検討したい。

水俣病の教師たちは、公害教育運動において期待されていた「科学者」や「組織者」としてではなく、患者の意志に従う「運転手」、「助っ人」として水俣病運動に参加していた。教師たちはその中で患者の思いに触れ、1970 年台初頭に水俣における水俣病授業実践が生起した。広瀬武の授業実践に代表される当時の授業実践は、当時教師を含む水俣の人々が水俣病問題から目を背けていた状況下で取り組まれた点において、重要な意義を有していたといえる。その一方で、授業の内容としては、公害の被害の実情を踏まえた上で、その責任追及を主眼としていた点において、1968 年の田中裕一による初の水俣病授業実践と同様であった。

1973 年 3 月の水俣病第一次訴訟判決後、水俣病問題は「外なる告発」だけでなく水俣病問題は「内なる差別」の問題へと転換しつつあった。水俣の教師たちは、患者との関わりの中で、自らがこうした「内なる差別」の当事者であることを自覚しながら、この問題において重要な役割を担おうとした。このような水俣病問題の転換の中で、水俣病の悲惨な現実を伝えた従来の授業実践は「内なる差別」を強化するものであったと反省され、新たな授業実践の追究のために 1976 年 8 月にサークルが発足した。

サークルは、人間の生存と差別の問題を深く内包する水俣病問題を学ぶことを通して、子どもたちがともに人間の豊かさや生き方を問うていくことを基本方針に据えて活動した。田中睦は、サークルにおいて水俣病の基本認識や、患者（家族）の思いを学びながら、授業実践を追究した。その授業実践は、子どもたちが水俣病問題の当事者であることを理解させる構造を有しており、従来の授業実践を乗り越えるものであったといえる。

以上のような水俣の教師たちの取り組みは、公害教育運動においていかなる意味を持つものであったか。水俣の教師たちの取り組みは、水俣病運動において当事者の経験を重視し、そこでの学びを授業実践を通して子どもたちに伝えた点に特徴が見出される。中内は、公害教育運動において教師は、住民運動に参加し、経済成長を重視する既成の科学へ対抗する科学を産出し、それを子どもたちに共有するという役割を果たしたと論じていた（中内 1998）。水俣の教師たちも、本論でも触れたように医学的知見などの科学的知識を授業実践に取り入れるなど、科学を軽視していたわけではない。しかし、石牟礼弘が水俣病運動で「理屈の壁を破ったところ」に価値を見出したように、水俣病運動に参加した教師たちは専門家の知見では計り知れない価値が当事者の運動に存在していることを認識していた。そして、授業実践においても、田中睦が「知識面の注入だけ」ではなく「できるだけ現実に近い資料」として患者家族からの聞き書きを用いたように、当事者の経験が重視された（田中 1980）。このように水俣における公害教育運動は、当事者の経験から学び、それを伝えることを重視した点において固有の意義を有していたといえる。

しかし、このような水俣の教師たちの取り組みも、他の公害教育運動や水俣病授業実践と同様に、構造的な制約を強く受けていたことが指摘される。当時の水俣においては、「患者差別弁論事件」に象徴されるように、水俣においては、患者（家族）などに対する批判的な認識がむしろ一般的であった。こうした状況において、本稿で検討した水俣の教師による授業実践は、そうした差別感情をいかに変革しうるか、という点に焦点化されていたといえるだろう。差別感情の変革が重要であることは言うまでもないことだが、こうした授業実践が、サークルの基本方針に示されたような「人間の豊かさ、豊かな暮らし」にいかに関接されるものであるのかは十分に示されなかったように思われる。

サークルはその後も活動を続け、1980 年代以降も新たな担い手を加えつつ多様な教育実践が取り組まれた。先に示した問題点も含め、1980 年代以降に教育実践がいかに深められたのかを明らかにすることを今後の課題としたい。

注

- 1) 内山（2014）で説明されているように、これらの聞き書きは、水俣病授業実践の教材としてまとめられた。
- 2) サークルは、この弁論の内容も教材化した（サークル 1979）。その内容については内山（2014）を参照。
- 3) 同書は、1981 年、1995 年、2007 年と改訂を重ね、現在も活用されている。同書の内容・構成については内山（2014）を参照。
- 4) 田中睦と患者（家族）との出会いについては安藤（2012）を参照。
- 5) 田中睦はこの授業について、「これはもうむちゃくちゃ乱暴な授業です。もうチッソ攻撃ですよ。チッソ批判の授業です。」であったと語っている（筆者による聞き取り、2021 年 11 月実施）。

引用文献

- 「水俣・芦北公害研究サークルの経過」, 熊本県教職員組合教文部編, 1977, 『熊本教育』, 348:67-71.
- 安藤聡彦, 2012, 「水俣市における「水俣病の授業」の誕生」, 安藤聡彦（研究代表者）『公害教育運動の基礎的研究』, 43-57.
- 内山仁, 2014, 「水俣芦北地域における水俣病教育の教育方法学的検討—「水俣芦北公害研究サークル」の活動を中心に—」, 『九州教育学会研究紀要』, 42:117-124.
- 石牟礼弘, 1974, 「水俣病裁判の経過」, 「公害と教育」研究会編『「公害と教育」水俣集会の報告』, 明治図書, 139-142.
- 梅田正敏・西弘, 1974, 「水俣病闘争と教師」, 「公害と教育」研究会前掲, 101-105.
- 田中睦, 1978, 『水俣・芦北からの報告—サークル 1 年— 日教組第 27 次教育研究全国集会報告書』, 23:1-11.
- 田中睦, 1980, 「第 5 学年 3 組 水俣病学習指導案」, 広瀬武『第 30 次県教研第 18 分科会 公害と教育 水俣芦北からの報告 3』.
- 田中裕一, 1972, 「中学校社会科学学習実践例」, 熊本県国民教育研究所ほか編『公害と教育』, 55-65.
- 丹野春香, 2012, 「水俣市における公害教育運動の基盤 ; 「水俣病市民会議」を中心に」, 安藤前掲, 24-42.
- 鶴山寅亀, 1974, 「水俣病と教師」, 「公害と教育」研究会前掲, 29-32.
- 鶴山寅亀, 1977, 「公害教育の実践例」, 熊本県教職員組合教文部編前掲, 33-43.
- 土井妙子, 2018, 「水俣における公害教育—水俣葦北公害研究サークルの活動に着目して—」『金沢大学人間社会研究域学校教育系紀要』, 10:81-92.
- 中内敏夫, 1998, 「公害学習運動にみられる——参加し、記録し、共有する」『中内敏夫著作集 I 「教室」をひらく』, 藤原書店, 456-467.

- 西弘, 1977, 『公害と教育 水俣芦北報告—反省と新しい実践を— 日教組第 26 次教育研究全国集会報告書』 23:1-10.
- 西弘, 1979, 『第 28 次県教研第 19 分科会 公害と教育 水俣芦北からの報告 (3)』
- 西弘, 1982, 「「ミナマタ」にかける—「水俣病一斉授業」とその後—」, 『解放教育』 152:40-46.
- 広瀬武, 1974, 「水俣病の授業実践」, 「公害と教育」研究会前掲, 63-70.
- 広瀬武, 1994, 「私にとっての水俣病」, 熊本県部落解放研究会編『部落解放研究くまもと』, 27:2-17.
- 藤岡貞彦, 1974, 「「住民運動分科会」の到達点—基調提案 (2) —」, 「公害と教育」研究会前掲, 98-101.
- 藤岡貞彦, 1975, 「公害学習の成立」, 国民教育研究所編『公害学習の展開』, 草土文化, 16-32.
- 松本博司, 1972, 「[資料 7] —小学校 5 年で「公害」をどう教えたか—」, 『公害と教育 (別冊資料) 新認定水俣病患者をめぐる市民の動き 日教組第 21 次教育研究全国集会報告書』, 22:11-14.
- 水俣芦北公害研究サークル, 1979, 「「水俣病」の基本認識として—授業実践上の留意点—」 熊本県教職員組合教文部編, 『熊本教育』, 372:43-49.
- 水俣芦北公害研究サークル, 1979, 『水俣病・授業実践のために』.